

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3570101927		
法人名	社会福祉法人 下関市社会福祉協議会		
事業所名	下関市社協 グループホームそまじ		
所在地	〒759-5512 山口県下関市豊北町大字田耕2790番地		TEL 083-783-0441
自己評価作成日	令和04年11月17日	評価結果市町受理日	令和05年01月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域の方との恒例行事である夏祭りは、今年もコロナ禍の為中止となりましたが、ホーム内でのみ夏祭りを行いました。そーめん流しをしたり、職員がオードブルを作り、外で食事を。その後、皆さんで火花をして楽しみました。そーめん流しは入居者の方も喜ばれ、毎年の恒例行事にしようと思います。今年もコロナ禍継続で、皆さん揃っての外出とはいきませんが、少しでも気分転換出来るよう、少人数での外出支援を行っています。食事は毎食手作りで提供しており、旬の食材をふんだんに利用しています。地域の方が野菜を持ってきて下さることも、入居者の方には、それぞれ出来る事を日々の生活の中で無理のないようにしていただきながら、自宅で生活しているのと同じような感じで過ごしてもらっています。職員10名のうち8名が介護福祉士の資格を持っており、専門性を必要とする認知症介護に活かしています。

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/35/index.php">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/35/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号		TEL 093-582-0294
訪問調査日	令和04年12月21日	評価結果確定日	令和05年01月13日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「住み慣れた地域で馴染みのある言葉に囲まれてゆっくりと過ごします」の理念の下、2005年2月に開設した1ユニット定員9名のグループホームである。目の前には田園風景が広がり、自然豊かな環境の中、四季折々の景色を眺めることが利用者の喜びとなっている。医療面は、利用者全員がホーム提携医の定期的な往診を受け、必要時には訪問看護を利用し、安心の体制が整っている。畑で採れた野菜や差し入れの野菜、魚等を使って職員が作る家庭的で美味しい食事を提供し、週2回、近所の鮮魚店から仕入れる新鮮な刺身は利用者の大きな楽しみである。年3回発行のホーム便り「だんらん」を自治会に回覧し、地区の掲示板に掲示、近隣に配布して利用者の暮らしぶりを発信し、ホーム周辺の草刈り、野菜、魚の差し入れがある等、地域からの温かな支援を受けている。多くの職員が介護福祉士の資格を持ち、専門性を持って利用者に寄り添い、「入居して本人の表情が明るくなった」と、家族からの信頼も厚い、「グループホーム そまじ」である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～56で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
57	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:24. 25. 26)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	64	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:10. 11. 20)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
58	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:19. 39)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	65	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2. 21)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
59	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:5)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
60	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38. 39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員は、生き活きと働いている (参考項目:12. 13)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:50)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:31. 32)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
63	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:29)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

## 自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた地域で馴染みのある言葉に囲まれてゆっくりと過ごしています。親しみのある会話の中にも尊敬を持って接している。	「住み慣れた地域で馴染みのある言葉に囲まれてゆっくりと過ごします」を理念に掲げ、玄関の見やすい場所に掲示している。職員は理念の意義や目的を理解して、利用者本位の介護サービスの提供に取り組んでいる。	開設17年目であり、改めて理念を振り返る機会もなくなっている。定期的に自分達のケアの柱である理念を確認し、振り返る機会を持つことを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年もコロナ禍のため夏祭りなどの行事が中止となっているが、常に情報交換は行っている。	以前は、夏祭りなどのホーム行事に地域の方を招き、地域の行事や活動に地域の一員として参加していたが、コロナ禍の中で現在は自粛している。ホーム便り「だんらん」を地域に回覧、掲示して、ホームの様子を積極的に発信している。近所の方からの差し入れも多く、日常的に交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホームの新聞(だんらん)を地域に回覧、掲示してホームでの様子が分かるようにしている。		
4	(3)	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	自己評価することで再確認・再認識し、改善に向けて努力している。	隔年ごとの外部評価に管理者と職員が協力して取り組み、職員一人ひとりに自己評価表を配布して記載してもらい、職員会議の中で意見交換してまとめている。外部評価の結果を受けて会議の中で検討し、次年度の目標計画を策定し、改善に向けて取り組んでいる。	
5	(4)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	報告を行う中で委員さんから意見や質問について出していただき、丁寧に説明を行っている。	二つの自治会の自治会長、民生児童委員、地域協力員、振興協議会役員、家族代表、ボランティア、地域包括支援センター職員、行政職員が委員となり、2ヶ月毎に開催されている。新型コロナ流行時には書面にて、利用者の状況、サービス提供状況、ヒヤリハット・事故、会議・研修会、行事等の報告を行っている。	
6	(5)	○市町との連携 市町担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の時、市民生活課・地域包括職員に国の制度等で疑問に思ったことなど気軽に質問し、回答をいただいている。	行政担当者に、介護の疑問点や困難事例の相談を行い、情報交換しながら連携を図っている。運営推進会議に地域包括支援センター職員、行政担当者が出席し、ホームの現状を伝え、情報提供を受け、協力関係を築いている。	
7	(6)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に2回内部研修を実施。職員が理解し、拘束を行わないように声掛け対応の工夫をしている。	「身体拘束等適正化・高齢者虐待防止委員会」を中心に、会議の中で年2回研修を行い、身体拘束が利用者及び弊害について理解を深めている。禁止行為の具体的な事例を挙げて検証し、身体拘束をしない、させない介護サービスの提供に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ケアマネージャーや家族からの情報をもとに要望も聞きながら入居後も本人の状態を把握し、会議等で話し合い職員間で共有。本人に寄り添ったケア作りに努めている。		
9		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護のテーマで内部研修を行い、制度の理解に努めている。安心して生活できるよう活用する機会があれば支援していきたい。		
10		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前にホームを見学してもらい、事前に説明を行っている。疑問や不安にも丁寧に説明をし、サービス内容や費用等も説明を行っている。		
11	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談・苦情については、ゆっくりと傾聴し分かることは説明し、分からないことは確認して返事をしている。	職員は、利用者の話をゆっくりと傾聴して、相談や苦情については出来るだけ迅速に対応している。家族に対しては、電話で相談や苦情を聴き取り、ホーム運営や介護サービスに反映させている。また、年3回事業所便り「だんらん」、個別に送付する「だんらん風景」を作成し、利用者の暮らしぶりを伝えている。	
12	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	朝礼時やケア会議、申し送り帳により職員間で共有出来ており、日々のケアに活かしている。年に一度(申告書)アンケートにて個人的な要望などを書いて、提出している。	ケア会議をほぼ全員参加の下月1回開催し、活発な意見交換が行われている。職員の意見や要望、提案等を聴き取り検討し、ホーム運営や業務改善に反映させている。年1回法人がアンケートを実施し、個人的に意見や要望を表す機会を設けている。	
13		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に1回、職員向けのアンケートがあり要望を聞いている。職員に合わせた労働日数で働きやすいよう努めている。		
14	(9)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修でテーマを決め、職員一人ずつスキルアップの機会を設けている。外部研修の参加も促している。	職員の経験や習熟度に合わせて外部研修や資格取得を奨励している。内部研修についてはテーマを決めて職員が交代で講師を務め実施している。法人研修はリモート研修が増えているが、積極的に参加している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍のため、研修会などには参加していない。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
16		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人が困ること、不安になることが一つでもなくて済むように、入居の前には全職員が本人の情報を把握し、共有している状態で迎えるようにしている。		
17		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時にゆっくりと時間をとって質問を受けている。安心していただけるように労をねぎらい傾聴することで、信頼関係が持てるようにしている。		
18		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族にどう過ごしてほしいか、本人がどう過ごしたいか要望・考え方を聞き、支援に活かしている。		
19		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者さんが活躍できる場面を作り、みんなで助け合いながら共同生活を良好に送れるよう、関係を築いている。		
20		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族が来所された時や、電話で利用者さんの近況を伝え、報告・相談を行っている。		
21	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ対策をしっかりと取りながら、馴染みの人との関係が途切れないように支援している。	コロナ禍の中、制限はあるが別棟での短時間の面会を継続している。個別支援として、利用者の生まれ育った家や嫁いだ家を訪ねてみる等、馴染みの場所に出かける支援に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さんのひとりの時間も大切にしつつ孤立しないよう、居間で一緒に過ごす機会を作っている。		
23		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後にもご家族と会う機会があった時、質問を受けたりすることがあるので、快く応じている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
24	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の発言や行動で希望・思いを汲み取り、意に添うにはどうしたら良いか職員・家族で話し合い、本人の意向に添えるよう努めている。	日常の会話の中から、利用者の思いや意向を聴き取り、家族と協力して希望の実現に向けて取り組んでいる。意向表出が難しい利用者については、家族やベテラン職員に相談し、利用者寄り添う中でその表情や仕草から、思いに近づく努力をしている。	
25		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族やケアマネからの情報に加え、本人と馴染みのある関係を築きながら得られた情報を、職員一同共有している。		
26		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来ること、出来ないことを生活の中で見極めながら、残存機能を低下させないように努めている。		
27	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族・職員と話し、より良い生活に向けたケアが出来るようにしている。担当者を中心に内容を確認しながら、その方に添った介護計画書を作成している。	担当職員は利用者や家族とコミュニケーションを取りながら、意見や要望を聴き取り、カンファレンスの中で話し合い、利用者本位の介護計画を6ヶ月毎に作成している。利用者の状態変化があれば、家族や主治医と話し合い、現状に即した介護計画をその都度作成している。	
28		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録・朝礼・申し送り帳・ケア会議等で情報を共有しながら、ケアに活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者一人ひとりに合ったケアをとの思いから、色々アイデアが出ては話合っている。利用者にとってより良いサービスが受けられることに繋がっている。		
30		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年もコロナ禍のため出来ないが、夏祭りを地域の協力で行なったり、地域の行事にも参加して楽しく過ごせる時間を支援している。		
31	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人の状態・訴えに気づき、主治医・家族に相談し、基本家族対応で受診をしてもらっている。	全員がホーム提携医を主治医とし、月1回の往診を受けている。必要時には主治医の判断で訪問看護師を利用し、24時間安心の医療体制が整っている。夜間、利用者の急変時には、主治医に連絡し、支持を仰いで救急搬送等を行っている。	
32		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の症状によっては、医師の指示で訪問看護を利用している。その時、利用者にとって良い治療が受けれるように、気づきを伝え相談し支援している。		
33		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際、日頃の生活内容を伝えられるように資料を持参で職員も同行している。また入院後も退院に向けて家族と連絡を取り合い、意向に添えるようにしている。		
34	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に、重度化した場合基本的にターミナルケアは行わないことを説明し、納得をいただいている。	重度化や終末期に向けたホームの方針について、契約時に説明し、承諾を得ている。利用者の重度化に伴い、家族、主治医と話し合い、医療機関や他施設への転居も含めた方針を関係者で共有し、支援に取り組んでいる。	
35	(15)	○事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	一人ひとりに合わせた支援内容を考えケアしている。薬も誤薬とならないように、違う職員が確認作業を行っている。行方不明防止のため、利用者の所在確認を職員間で声を掛け合いながら行っている。ケア会議の内部研修、運営推進会議時に消防署を迎えての指導で実践力をつけている。	事故防止対策マニュアルを基に、会議や研修会の中で話し合い、事故を未然に防ぐ体制を整えている、事故が発生した場合は職員間で連携し、迅速に対応できるように取り組んでいる。「利用者情報提供シート」を作成し、事故発生時に備えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	緊急連絡網で、全職員が直ぐにホームに来られるようになっている。事業所が他施設と協力体制を築いており、災害時に他施設が避難場所となる。	年2回、昼間想定避難訓練を実施し、近隣の施設に避難出来る体制を整えている。非常災害や、行方不明者捜索のための連絡網を整備し、地域の方の協力体制も確保している。また、災害に備えて飲料水や非常食の備蓄も行っている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
37	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日々のかかわりの中から、その方にとってなごみのある言葉で声掛けすることを心掛けている。	利用者の人格を尊重し、プライバシーを守る介護の在り方について職員会議や内部研修の中で話し合い、言葉遣いや対応に注意して、利用者が安全、安心に暮らせるよう支援している。また、利用者の個人情報の管理や職員の守秘義務については、管理者が職員に常に説明し、情報漏洩防止に取り組んでいる。	
38		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活を支援する中で、本人の意思に添った内容となるように、又要望に答えられるよう努めている。		
39		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	事故に気をつけながら、利用者の思い・希望に添えるよう、その方のペースで過ごしていただいている。		
40		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	慣れ親しんだ衣類、季節に合った物、好みの色の服を着ていただいている。		
41	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者が「出来る事」に合わせたお手伝いが出来るように見守り、職員と一緒に行動することで、食事に対して期待感が持てるよう支援している。	畑で採れた野菜や差し入れの魚や野菜を使って職員が交代で作る家庭的で美味しい食事を提供している。利用者と職員は同じテーブルに座り、談笑しながら食事の時間を楽しく過ごしている。利用者一人ひとりの能力を活かして料理の下拵えやおやつ作りに取り組み、「食」を楽しめるよう支援している。	
42		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに合った量を摂取できるようにしている。又食事の形態(刻み食、トロミを付ける)等、個々の嚥下状態に合わせている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、緑茶寒天を食べていただき、口腔ケアを行っている。おやつ後は、イソジンでうがいを行っている。夕食後は、口腔ケアの声掛けをして歯磨きやうがい、義歯洗浄剤を使用している。		
44	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄記録を確認し、一人ひとりの排泄パターンを見て声掛け誘導し、排泄の自立へ繋がるように支援している。	職員は、利用者の生活習慣や排泄パターンを把握し、早めの声掛けや誘導を行い、トイレでの排泄支援に取り組んでいる。夜間帯は、利用者の希望や体調に配慮して、トイレ誘導やポータブルトイレ、リハビリパンツにパットを使用する等、柔軟に対応している。	
45		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品を毎日摂っている。散歩や室内歩行を利用者の能力に合わせて行っている。利用者一人ひとりの排泄パターンを把握し、排便につながるよう緩下剤を利用している。		
46	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	本人の意向や身体状態に応じて、支援している。入浴記録表で確認し、週2回以上となるよう調整している。	利用者の希望や体調に配慮して入浴出来るよう取り組み、週2回以上の入浴となるよう支援している。入浴が困難な利用者には、無理強いせずに清拭や足浴に変更している。入浴は利用者と職員が一对一でゆっくり会話できる大切な時間と捉え、信頼関係を築いている。	
47		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の睡眠状況・体調や疲れ具合により、休息いただいている。又定期的にシーツ交換、布団乾燥を行い安眠できるようにしている。		
48		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬介助では、服用前他職員に名前等確認してもらい、飲んでいただいている。飲みにくい場合には、錠剤から粉薬に変えてもらったりと、服薬しやすいようにしている。		
49	(21)	○活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その方がホームで役割を持ち、日々の生活ができるよう支援し、喜びに繋げている。	利用者の希望や体調に合わせて、モップかけや洗濯物干し、畳み、ごみ箱作り、料理の下拵え等、利用者一人ひとりが役割を持って毎日の暮らしを生き生きと楽しめるように支援している。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けなような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今年もコロナ禍のため、皆さん一緒に外出が出来ず、家族会も出来ていない。ホームで気分転換に、散歩や外気浴・少人数での外出は行っている。	コロナ対策以前は、花見や外食、買い物、ドライブに出かけていた。現在、日常的にはホーム周辺の散歩や畑の野菜の手入れ、外気浴を行っている。また、個別や少人数での外出を実施し、利用者の気分転換を図っている。	
51		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族と相談して、ホームで預り管理している。コロナ禍のため出来ていないが、祭りの出店や、外出時に自分の好きな物を購入してもらったりなど。		
52		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、電話できるようにしている。本人が年賀状や手紙など出せるように、お手伝いしている。		
53	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関に花を飾っている。居間から外の風景が見渡せ、季節感を感じられるような会話をしている。	リビングルームから眺める田園風景や山々の景色は季節毎に変化し、利用者は居ながらにして季節を五感で感じている。壁面に利用者の笑顔の写真が貼られた回廊式の廊下の歩行訓練やそれぞれの役割、楽しみ事をしながら、利用者が思い思いにゆったりと過ごしているアットホームな雰囲気のある共用空間である。	
54		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや椅子など、利用者に合った物使用し、気の合った方同士で座ってもらったり、居場所の工夫をしている。		
55	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際に、自宅で使っていた物を持参し、家具・衣類・馴染みの物で部屋の居心地の良さを考えている。	入居前に利用者や家族と話し合い、利用者の馴染みの家具や寝具、家族の写真、身の回りの物を持ち込んでもらい、出来るだけ自宅と違和感のない雰囲気にして、利用者が安心して過ごせるよう配慮している。室内は清掃が行き届き、清潔な環境である。	
56		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	「出来る事」を安全に出来るように、椅子を準備したりしている。(自分で靴下が履ける)(自分で洗濯物を干す)など。廊下には手すりがあり、安心して歩けるようにしている。		